

アメリカ西部一人旅

一日目

リンカーンからフォルト・コリンズへ

Lincoln ~ Fort Collins

走りなれた 1-80 であるが、新しい発見を求めての旅となると、これはまた、期待が大きいせいか、いつものインターステーツが違った感覚で胸をときめかすものがあるから、人間の感覚なんていうものは、いかに、そのときの気持ちで感じ次第ということで、誠に驚くばかりである。Lincoln をでて、快調に西に、西にと距離を稼ぐ。今回のドライブで、とにかく、楽しみなのは、いまさらながらと思うのだが、ナビをお供にしたこと。前回のカンザスドライブ以来、やはり、アメリカを知るには、その土地土地のカルチャーに接しなければ、もったいないという気持ちから、今回からは、できるだけその土地にあるミュージアムを訪



さあ、いよいよ西に向けて出発。

空は真っ青、天気は上場。道路は真っ直ぐ、車は快調。

ねることにした。ところが、これまでのアトラスの地図だけが便りでは、ごくごく近くまでたどり着いても、なかなか目的の建物が見つからなかったりというケースがしばしばあったので、これでは、時間をかけていくのに勿体ない、それなら、確実に目的地まで案内してくれるナビを使わないわけはない、というわけで、今回、奮発して購入したというわけ。それだけにこのナビに対する期待は大きい。その旅の強力な助



こんないたずらも、旅の楽しみ

っ人を従えてのドライブであるから、これは胸が躍るというわけでした。

このナビ、なかなかのできもの。価格は日本のものと比べると十分の一くらいのものですか、これで、北米全土をカバーしているというから、今にして思えば、なんで、早くとり付けなかったのかと自分でもすこし悔やまれるほどのものである。

というわけで、ネブラスカをでるところから、このナビが大活躍となる。インターステーツの分岐点も事前に教えてくれるし、目的地までの到着時間まで計算してくれるのだ。ワイオミングに入り、今回は、シャイアンの町で、ワイオミングの歴史を学ぼうとミュージアムを訪問することを計画していた。最初は、ステーツミュージアムである。ワイオミングには、4:30 頃につく予定で計算していたが、朝、少し早たちできたことと、それに、



アメリカの博物館は、こんなもの当たり前

なんとリンカーンとシャイアンでは、一時間の時差があり、二時間近くも早く到着することができた。というわけで、悠々の博物館見学ができたというわけ。この州立博物館は、ステーツのキャピタルハウスの近くにあるが、このあたりがすべて一方通行になっているため、普通ではなかなかたどり着くことができない。ところがナビだと、簡単に、しかも性格に、目的地までの距離ばかりでなく、曲がり角の曲がり方まで案内してくれるのである。通り過ぎてもしっかりと計算しなおして、もう一度ルートを探し出してくれる。だから、つつい行き過ぎても、あるいは、今回のように、インターステーツをひとつ早目に降りてもまったく心配ない。そんなわけで、容易に目的の博物館につく。

この博物館は、州立というだけに、ワイオミングの古代からの歴史をまとめたというもの。歴史の始まりは、太古の恐竜が生息して時代よりも、もっと以前の、まだ、このあたりが海の底だったという話からはじまる。たくさんの貝殻の化石が発掘されており、しかも、その鮮明さには驚くばかりである。鉱山に勤めるひとが、恐竜の化石集めに精を出し、ついには、職業を変えたというようなことまで紹介されている。恐竜の大腿骨の部分が飾られていたが、その大きさは、成人の大きさほどである。そして、やがて、人間が出現してくると、これは、インディアンが主役となるが、長い期間の空白のときを超えて、白人とインディアンのかかわりが紹介されていた。もちろん、この町の名前の由来はシャイアン族にちなんでいることは疑いの余地がない。そのシャイアン族をまとめ白人との友好関係を確立した酋長の一生が克明に紹介されていた。白人にとっていかにインディアンと共存していくかということが、西部開拓の歴史でもあったわけだ。そんな歴史を存分に勉強できるような展示の仕方は、いまが夏休みで、こうした博物館を訪ねて、ふるさとの歴史を勉強しようと尋ねてくる子供たちには、とてもよい、教材になっている。実物に手を触れ、自分たちとの曾おじいさん、そのまたおじいさんたちが自然と闘って、いかに今の時代を築いてきたかを、楽しみながら勉強できるというわけ。子供ずれの人とは、それなりの目的できているのであろうが、若い青年や、お年寄りが夫婦でここを尋ね、熱心に解説を



Nelson 博物館は、街の一角にあり、とても分かりにくい
が、ナビのおかげですぐに見つけることができた。

しているのであろうが、とにかく、インディアンの使った武器と、西洋人が持ち込んだ銃の展示は見事であった。しかし、なんといっても、この博物館の見ものは、こうした武器により捕獲された動物の剥製。これが、また凄い。大型のバイソンから始まり、アメリカ大陸に生息している動物はすべて、剥製にされて展示されているのかと思うほど、たくさんの剥製がところ狭しと並んでいるのである。その数に圧倒され、夕方など、人影が少なくなってからでは、この建物に入ることさえ、身がすくんでしまうのでは思うほどであった。たくさんの種類のピストルが展示されていたが、気を引いたのは、自分が持っているレプリカと同じタイプのピストル。コルトのピストルであるが、たくさんの展示の中に、似たものを見つけて、思わずしてやっつりの気持ち。ここで、ガンベルトにつけるガンの保持する入れ物の形を説くと研究。よくよく見ると、これがよくできている。日本に帰ったら自分で挑戦するつもり。

ここで、もうひとつの目的の博物館、**Cheyenne Frontier Old**

Museum のパンフを入手。おかげで、誠に効率よく、短い時間の間に三つも博物館を楽しむことができた。この博物館は、インディアンの歴史を物語るものがないわけではないが、中心は、ここに白人が入植してからのもの。というわけで、名前は **Old** であるが、中身は、比較的新しい時代のシャイアンの紹介であった。カウボーイの生活、この町で開かれるロ

読み、感慨にふけていたのは、一体どんな思いがあつてのことなのだろうか、余分な推察をしてしまった。

つぎに尋ねたのは、インディアンと、カウボーイたちが使った武器を集めたという **Nelson Museum**。ここも、ナビのおかげで町中の一角にある小さな入り口の建物の博物館であったが、難なく見つけることができた。この博物館、多分、個人の趣味で収集したものを博物館として展示



Wyoming のトレードマークにもなっているロデオの像の
まえで。

デオの歴史、そして、ずらりとならんだステージコーチの展示など。場所が、シャイアンの中央公園の中にあり、毎年、ここで勝手のカウボーイの活躍をたたえるお祭りがあるそうだが、その祭りを中心的に担ってきたその役割をまとめたような博物館という気がした。



ナビのおかげで、シャイアンのことを非常に短時間の間にたくさん知ることができた。こうして、予定の時間になり、今日の宿泊地のコロラド、フォルト・コリンズに向かう。ここは、一昨年の夏に来たことのある町。だが、あの時は、ラブランドに宿が取れず、ここまで探してきたので、町を見学するなどという余裕はとてもなかった。今回、すこしはやめに到着したということ

街の目抜き通りの中央分離帯にはこんな素敵な噴水が。

で、街中をドライブ。この町、名前からして歴史のあることは分るが、それ

Fort Collins の街

にしてもメインストリートはなかなか趣のあるしゃれた町。目抜き通りには、両側の歩道の脇のほかに中央にも駐車場があり、ここに車を止めて、楽しいイブニングの食事をテラスでできるという店がずらりと並んでいるのである。間口は狭いが、その奥行きが凄い。中にはいと、デパートのワンフロアがあるくらいの広さである。レストランしかり、みやげ物屋がしかり、そして、ちょっと覗いた電気屋さんしかりである。いつもは通り過ぎるだけの町も、こうして、すこし、散歩をしてみると、また、思いがけない発見もあるものだとならためて心した次第。

第一日目の工程

Lincoln → North Plate → Border to Wyoming → Cheyenne →

Fort Collins

この日の走行距離は、515 miles でした。

アメリカ西部一人旅

二日目

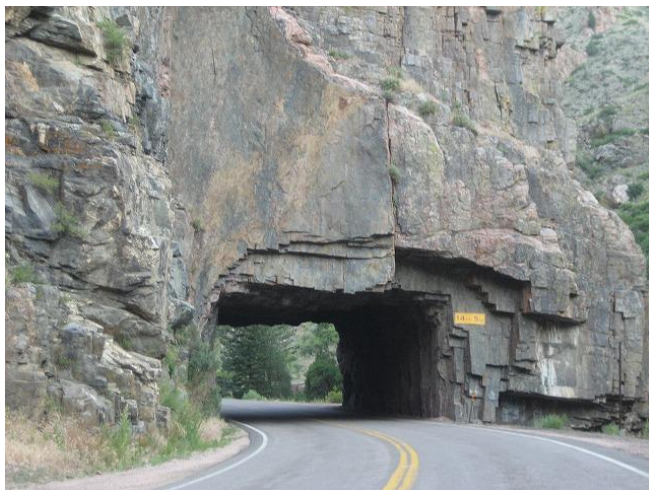
Fort Collins から Salt Lake Lehi まで

この日は、コロラド越えをして、ユタの州都ソールトレイクまでのドライブ。コロラドを越えるには沢山のルートがありますが、コロラドロッキーの高山ハイウエーは 2 度ほど走ったことがありますし、また、時間もそれなりに掛かります。また、インターステーツ I-70 は帰りのルートにしたので、今回は、その中でも一番北の Medicine Bow の山を越えるルートを選択しました。

コロラドの自然、これまた凄い渓谷
ロッキーは、その名のとおり、山が岩でできているのです。その岩山が氷河時代に凍りでえぐられて肌がむき出しになっている。それを見ることができるのがコロラド越えの醍醐味。三千メートルの高山ハイウエーを越えるときには、ラブランドからエステスパークというリゾートの街までの溪流沿いの道がものすごい岩の絶壁の間を走っている道路であるが、この Fort Collins からの 14 号線



も凄い迫力の断崖の間を抜けて行く道。とにかく、道路は数十メートルの岩を切り崩して作られている。片方には溪流が流れ、ところどころ広くなったところは、キャンプ場になっており、アメリカ人は例のキャンピングカーをここに止めて、一週間も二週間もバケーションを楽しむのである。溪流釣りばかりでなく、ある日は、乗馬をし、ある日はサイクリングに行き、また、山歩き、溪流下りなどなど、存分に自然を満喫するのである。まっ



たく、何時仕事をしているのかと疑いたくなるようなそのゴウジャスな遊びっぷりに、頭が下がる。子供たちは、すでに 6 月から学年末の休みが始まっており、これが 9 月までであるから、この間にいかに自然のなかで、社会勉強、科学の知識を直に体験して身につけるかということが、真剣に考えられているという感じである。

そこを抜けると今度は、どこまでも広がる大平原。

切り立った崖の下をくぐりぬけ、遠くの雪山を望みながら、高原ドライブを楽しむ。道路が急カーブのあるような道ではないので、それほど高いところに来ているという気はしなかったが、疲れをとるために車を止めて、ちょっと背伸びをし、手足の軽い運動をしてみると息切れがする。なんとなんと標高、2000メートルもあるのだ。すでにデンバーあたりでも、5260ftの標高であるから、すこし、山を登っただけでもすぐにこの高さになる。其れでも、こうしたところにある街には、その土地のひとが平然と住んでいるのだから、全く、感が狂ってしまう。何しろ日本では、2000メートルの高さなどというとスポーツ選手が、仰々しく、高山トレーニングなどと称して本気で合宿をするのであるから。ここなら、毎日が高山トレーニングなのである。その証拠に、この崖道を通り抜けると、そこ



には大平原が広がっていて、ここが、それほど高いところであるなどと微塵も感じないのであるから不思議だ。Walden という街を中心にして、この辺りに大平原が広がっており、Arapaho の自然居住区となっている。



途中、Steamboat Spring という街を通るが、ここは、スキーのリゾート地。冬はスキーであるが、夏もなかなか避暑地として賑わっている。夏なのに標高が高いせいか今花が真っ盛りの大平原を越えると、そこが今度はバレーとなっていて、その下に湖がある。こんな田舎に若者達が集まって

くるのである。お花畑を楽しんだあと、真っ直ぐ西に進むと次第に緑が少なくなる。コロラドの豊かな水に恵まれた緑地とかわり、岩と土がむき出しの風景になる。このあたりからユタにかけてが鉱物の豊かな土地。その鉱山の発展とともに、ここで発見されたのが恐竜の化石。コロラドとユタの州境には、その名も **Dinosaur** という街がある。ここには、沢山の化石が出てきたと見えて、この辺り一体が化石の発掘現場となっている。専門家でなくても容易に化石が発掘できるところがアメリカである。勿論、これを規制しているのかもしれないが、そんなことをしても、幾らでもそれ以外の場所から化石が出てくるのだから、規制の意味は全くないのであろう。どこでも土を掘り返せば、太古の時代の恐竜の骨がごろごろでてくるのである。化石マニアには、全く宝の山なのである。



何だ、車が燃えている。

辺りの風景がいかにも、鉱山の土地柄という感じになりユタに入る。ご存知のようにユタのソールトレイクは、冬のオリンピックが開かれたところ。というわけで、こんな看板が歓迎してくれました。

土地はいかにも、雨が少ないという感じがします。そして、**Vernal** という街を過ぎ、少し起伏のある高原を走っていたら、前方に積んだ干草

が煙を吐いている自動車を見つけた。すぐ前に走っていた車が急に止まるのでびっくりしたら、警備隊の車がいて、仕切りに走り回っている。私のところにきて、救急隊に緊急連絡が取れるかと聞いているようだ。こちらは、携帯をもっているがそんな風に使ったことがない。丁度、前に車のドライバーが携帯で連絡を取っている模様。こちらは、一本しかないこの道路を何とか速く通り抜けなくてはと、そのほうばかりに気がいく。連絡も取れたようだし、道路はすでに煙で対向車線が見えない状態であったが、ここを半ば盲運転の状態で何とかすり抜ける。その頃には、荷台の草から炎がかなり立ち始め、とても素人では手をつけられる状態ではなかった。もう一分も遅ければ、煙で通れなかったろう、と胸を撫で下ろしながら、あのあとあのトラックはどうなるのかなと心配しながら、先を急いだ。そして、そして、**Duchesne** という街に



近づいたころ、どうも右の先方に見える山の上に嫌に雲が掛かっている。始めは、あの辺り、雨なのかも知れないと思っていたが、次第にその雲のようなものが、空に立ち上っているというのがわかってきた。しかも、その筋が何筋にも渡っているのである。

あれー。今度は山火事。迫力が違う。

「あっ。これは、ひょっとして、本物の山火事かも知れない。」と、よくよく見ると、その山の谷あいから、いくつもの煙が上がっているのだ。そのものすごさ。そうこうしているうちに消防車がそちらのほうに向かって走っていく。

この日の晩、知ったことだが、ユタでの山火事、すでに3日も燃え続けており、しかも、消防のためのレスキュー隊の隊員が三人も犠牲になったとニュースが報じていた。その山火事の迫力。これは、只ものではないとつくづく思い知らされたわけである。ところが、山火事、次の日もみることになる。とにかく、この辺り空気が乾燥しているのであろう。それにしても、本物の山火事、迫力が違う。



こんな経験をして、この日の宿泊地、ソールトレイクに到着。ただ、ナビを頼りすぎ、まだ、使い慣れていないせいか、ナビの確認のしかたが分からず、この日、宿がソールトレイクの町中にあるものと指定してしまい、往復、40マイルの無駄なドライブしてしまった。でも、明日の日の下調べができた、まずは納得した。何しろ、ソールトレイクはかなりの大きな街だし、時間はたっぷりあるものの、迷っている暇はないのだから。



Fort Collins → Steamboat spring → Craig → Dinosaur → Vernal →

Roosevelt → Duchesne → Helper → Lehi

この日の走行距離は、594 miles でした。

アメリカ西部一人旅

三日目

昨日、Lehi の町が、Salt Lake City の中にあるものと勘違いし、思わぬところで Salt Lake City をした調べする形になったが、この日、念のためにとすこし早めにホテルを出発。ところが流石、州都のあるところ、インターステーツは月曜日の朝ということで猛烈な混みよう。アメリカに来て初めて交通渋滞を経験するしまつ。4車線もある高速、しかも、前も後ろもぎっしりと車が詰まっているからかなり緊張であるが、ここはナビが強力な助っ人。まず、これを頼りに問題なく、目的地のテンプル広場に着く。といっても、初めての土地、さてさて、どこに車を止めればよいのやらさっぱり分らない。というわけで、とりあえず、キャピタルハウスの前まで行くことにした。ここなら、普通なら、車を止めるねスペースは十分あるはず。ここで、ひとまず今日の行動の再確認。ところが車を入れたところが、ステールパトロールの駐車場。ここに朝早く、見知らぬ車が入り込んできたということで、この日の行動確認をしているシェリフたちが、怪訝そうに見ている。こちらは、公共の駐車場なら大丈夫と知らん顔をして車をとめ、キャピタルハウスの写真を撮り始めた。観光客ならたいしたことはないだろうと思ってくれたのか、いつの間にか、このパトロール隊は任務について言った。

モルモン教の聖地ソールトレイクシティー テンプル

そこまではよいが、さて、目的のテンプルに入るには車をどこに置けばよいのかさっぱり分らない。このキャピタルハウスの駐車場ならただと止められるが、数百メートルも離れている。近くにパブリックの駐車場はないかと探したが、なかなか適当なところが見つからない。ちょっと離れたところに教



会があり、ここならと思ったが、それでもまだかなり離れている。町を見物するつもりで、右折、右折を繰り返し、何度も同じ場所はぐるぐるまわり、やっとのこと、templの斜交いに駐車場があることが分った。ナビで探したが、駐車場の名前が分らないととんでもないところを紹介してくれる。そんなわけで、ここは、運良くパブリックの駐車場に車を止めることができた。この駐車場、朝、まだ、早かったためか、十分にスペースがあり、しかも、駐車料金が、12時間とめて、5ドルという、templの見学者用とは言え、なんと、気の利いた料金なんだろう。我ながら感心した次第。 templを中心にtempl広場があり、ここにさまざまな見学場所がある。一日二度ほど無料のツアーがあるとのことだったが、所要時間に二時間弱とか。これでは、時間が足りないここは断念。

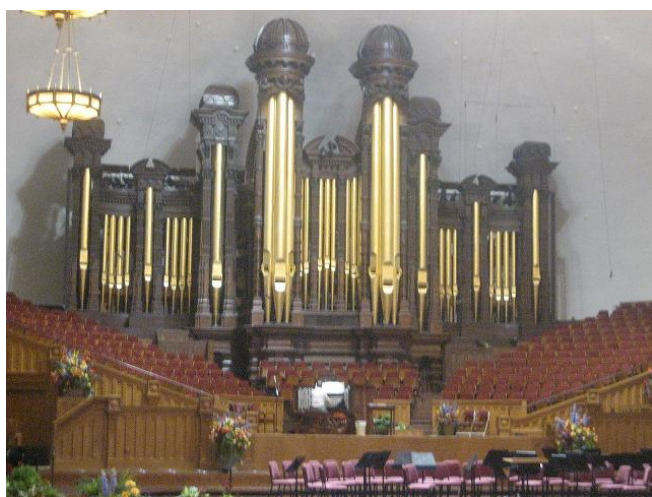
templ広場に入ると、ビジターセンターがある。ここが開くまでのほんのわずかの時間、玄関の前に若い女性がたくさん集まって、記念写真を撮っていた。てっきり見学者だと思い、ついでに私の写真もとってもらった。胸にカナダの国旗のマークがついていた。

「カナダから来たの」と聞いたら、そうだという。ところがこの子達、字は、世界各地から



世界中の国々から集まった聖女たち

から集まってきた、奉仕の信者たちであることがすぐにわかった。ビジターセンターの中にはいると先ほど玄関前で記念写真を撮っていた娘さんたちが、案内をしてくれるのである。そういえば、ガイドブックに日本語のツアーガイドもあるなど書いてあった。世界各地から、信者の中から選ばれたこうした娘さんたちがここにきて奉仕をしているわけだ。見学の途中、「中国からですか、それとも韓国からですか」などと親しみを込めて話しかけてくる娘さんがいた。話を聞くとグアテマラか



これがかの有名なパイプオルガン。運良く演奏してくれた。

らここに来ているという。記念の写真を撮ってあげますという。ありがたく、聖者の像の前で記念の写真をしっかりとってもらった。お礼にと、「あなたの写真も取りたい」といっ

たら、快く承諾し、写真に納まってくれた。とにかく、親しみ易く、新設なのである。信者が家族連れでくると、賛美歌を記念に合唱するなどのサービスぶり。これには感激してしまう。別の場所では、香港の女性が親しみ易く、日本語で「ご機嫌いかがですか」と聞いてきた。ここにも日本から来ている友達がいる、その人から片言の日本語を習っているのだそうだ。若いだけに、とにかく積極的で、とても人懐っこく、素敵なお嬢さんだった。ビジターセンターとでて、ふと立ち寄った礼拝堂では、よく知られた世界一のパイプオルガンのある建物であった。中に入ったら、私ひとりだけであったが、疲れて椅子で一休みと思った途端、パイプオルガンの音が、突然、バーン、バーンと鳴り始めた。ガイドブックでは、よほどのことがない限り、このリハーサルの音は聞けないと説明されていたが、なぜか、この日、タイミングよく、パイプオルガンの練習をとくと聞くことができた。世界一のものだけはある。強烈に腹の置くまでしみこんでくる感じの音であった。この幸運に気をよくし、テンプルのまわりをぐるりと一周。とにかく、ごくごく近くから、モルモン教の総本山の建物を眺めるのであるから、大変なことだ。記念の写真をたくさん撮り、そのあと、公園のなかをぶらぶらしていたら、ある建物の入り口で日本人の信者の方とたまたま話しをする機会ができた。東京から来ているという。これから、モルモン教の生みの親の人の映画があるので、二時間くらいだが、是非とも見に行こうという。今日はとてもそんな時間はないと丁重に断る。ネブラスカでも話を聞く機会があれば是非聞いてほしいと、そのつもりなり教会を紹介すると、とても親しみ易く話をしてくれた。確かに、



アメリカで生活するには、キリスト教に限らず、精神的なバックグラウンドが必要である。日曜に教会にも行かない人というので、区別を受けることもあるし、また、信心の薄い人との見方をされることがしばしばあるようだ。それに、教会がこちらの人の社会の中でのひとつのネットワークになっている。そんなことで、長くこちらに居るならという気がしないでもないが、私が興味あるのは、モルモン教の教えよりも、その苦難の旅の後、ここソールトレイクを聖地と定めた先人達の苦勞の旅、モルモントレイルの歴史、そのものである。モルモントレイルは、アメリカの東部を追われた信者達が自分たちの聖地を求めて、西に、西にと幌馬車を連ねて旅をしたその軌跡だ。イリノイ、アイオワからネブラスカに入り、ここを横断する。そして、ワイオミングに入り、ユタに下って、ここ、ソールトレイクにたどり着いたわけだ。その長い道のりには、自然との闘い、上との戦い、

そして、原住民との戦いの連続。宗教を信ずるひとは、苦難が厳しければ厳しいほど信仰心が強くなるというから、これは、普通の人間にはなかなか理解しがたいこと。若いころ、バイブルの勉強会を覗いたり、キルケゴールの「死に至る病」を読んだり、宗教心とはいかなるものかと勉強したこともあるが、それももう随分昔のことになりました。ドライブしていると、どんな小さな町や村にも、その土地で一番目立つ建物として教会が神々しく輝いているし、これをみて、今は、ただ、純粹に信仰心の厚い方たちのその信念の強さに驚き、宗教の持つ偉大な力の結果を感じているだけです。そのひとつの表現が、このすばらしい芸術的とも言えるテンプル、そして、世界一といわれるパイプオルガンなどなど。こうしたものを身近に肌で感じることはできただけでも、宗教の聖地に來た意味があるような気がします。

塩の湖、ソールトレイク

たまたまこの教会のなかで、日本語を話す二人連れがいました。みるからに既にリタイアした人がアメリカ旅行のついでにここに立ち寄ったという感じでした。そのときはそれほど



塩の湖に浮かぶ島。

ど気にも留めなかったし、時間もなかったので親しく話をするつもりもありませんでした。しかし、このモルモン教のテンプルを後にし、ソールトレイクの湖を見に行き、そこで、また、その二人と出会うことになりました。湖といっても、この広さは並みのものではありませんし、また、出会った場所も、たまたま、私が湖を見にいくといって選んだマリナーだったのです。

町の中心から20マイルくら

い離れているのですが、ここで、ソールトレイクの水につからなくては、この場所を選んだのですが、その日本人の二人づれご夫婦も、たまたまここに來たということでした。本当なら、湖の中に浮ぶ島に渡る予定だったのが、何の弾みかここにきてしまったと。話をきけば、イエローストーンを見て、ソールトレイクに來ているという。これから、アーチーズに行き、モニュメントバレーを通って、グランドキャニオンに行くという。二人で気楽にドライブをしているようだ。それにしても、レンタカーを借りて、自分たちだけで長旅をしているこの二人、福岡からきているというが、どうも、アメリカの生活に随分なれているようだった。ご主人が運転してのドライブのようだが、私と同年輩ぐらいのかた。

ご夫婦での随分楽しい旅のようで、奥さんは、ソールトレイクで泳ごうかなどという程の積極的な方だった。お互い、あまり詮索するようなことは聞かず、これからの旅のことを話して、気持ちよく分かれた。そのソールトレイクを離れるときに隣に泊っていた車の一家は湖で泳いで来たばかりだった。どこから来たのかと尋ねたら、ミズーリだという。ネブラスカより、もう遠い州だ。これは、軍配はあちらに上がった。

ユタレイク

ソールトレイクから、I-80 を西に走れば、ネバタに入り、これを横断し、カールソン・シティ、タホに行くことができる。しかし、今回は、この道ではなく、アメリカで一番淋しい道路、アトラスの地図帳には **loneliest road** と紹介されているルート 50 を走ることにした。ソールトレイクから南に 6 号を走り、ここに合流する。この 6 号にでるために 68 号というローカルの高速を走った。実は、南に下がるには、I-25 まで戻るルートがあるのだが、ソールトレイクの南西に、ビンガムマインという露天掘りでは世界一という銅の鉱山があるということで、ここに立ち寄るためにこのルートを選んだ。ところが、残念なことに、詳しいアクセスの道が分からず、この鉱山にはとうとうたどり着くことができなかった。それでも、その鉱山は遠くから見ることができ、その大きさが只者でないことは十分に理解することができた。なにしろ、一山すべてが銅の鉱山になっていて、そこにクレーターのような形で鉱山が掘り込まれているのだそう。そんな形をパンフレットから想像した。ルート 68 号に沿ってユタレイクが広がっている。なんと、驚いたことにこの湖の水が緑色をしているのだ。その緑の色が中途半端ではない。まるで、湖一面に緑の藻が充満しているかのように見えるが、そうではなく、水、そのものが緑色なのである。となると、これはなにか銅イオンのためではないかと思わずにいられない。

日本の焼き物に見事な緑色を出す織部焼きというのがある。調べてみたら、これは、透明釉に酸化銅を 3% から 5% 加えて酸化焼成をすると緑色の釉薬となるのだそう。酸化銅が少しずつ溶け出して、釉薬のようなものを作り水を着色しているかも知れないと、自分なりに納得したが、真偽の程は分からない。そんなことを考えながら、さわやかな湖畔の風をうけてドライブしていたら、また、



ここでも、また、山火事

それほど遠くない山から一筋の白煙が真っ直ぐ空に立ち上っている。おっ、また山火事だ。この 山火事、まだ煙の立ち昇る数も少ない。ということは、まだ発声したばかりという

ことか。それにしてもこの辺りの乾燥の具合がよくわかる。驚いたことにこのハイウェイ、やたらと鳥の死骸が多い。なぜか理由は分からないが、湖のそば、夜ここを走る車のライトに鳥達が飛び込んでくるのであろう。それだけまた野鳥も多いということが。地図によれば、この辺りから西が **Desert** となっている。果たしてどんな地形が待っているのか楽しみに車を走らす。確かにこのあたり砂漠というほどではないが、とにかくどこまでも見晴らしのきく大平原。何もないのである。あるのは、ときどき動物が高速道路に入り込まないような張り巡らされた鉄条網ぐらい。まことに殺風景なのである。ところが、ここであつくり。そんな何もないところに忽然と工場がたっているのである。しかも、回りの警備がかなりきびしいような囲いがしてある。何なのだろうと気を引かないわけがない。というわけで、この工場へのアクセス道路のところで案内板をみれば、なんとこれがウランの工場と書いてある。なるほど、ここなら、スパイもやってこないし、襲うにしても、相当な時間がかかることと大掛かりになり、とても逃げおおせるようなところではないとすぐに理解できた。



人影のない大平原を走る

た。それにしてもここにもし、通ってくるとすれば、何時間もかかるはず。一体どこから通勤しているのだろうかと思ふ心配。デルタと言う街から州境までがこれまた何もないところ。80mile ほど、ガソリンスタンドもないのである。こんなところを走るには、ガソリンをいつも万タンにしておかなくてはならないとガイドブックにある。この道を走って

いると突然、前方に白い平原が出現する。最初は白い岩肌かと思ったが、それにしても、平地に広大に広がっている。それでも水できないようだ。午前中にソールトレイクの塩を見てきたが、まさか、こんな砂漠のようなところにこれほど大きな塩の平原があるとは思わなかった。とにかく不思議でならない。結局近づいて見たら、これこそ、正真正銘の塩の原だった。地図には、**Sevier Lake** とあり、かつこして **Dry** と説明がついている。なるほど、これが、かつて湖であったところが干上がってできた塩原なのか、とやっと納得。それにしても、その広さには驚く。行けども行けどもという表現がぴったりなのである。が地図では、この道路に面しているのはそのほんの一部とある。一体、このアメリカの自然はどうなっているのだろうか。そんなことに思いをめぐらして、一山越える。と、今度はそこに、岩のドームのように地形が延々と続いていた。神々の座を思わせる岩山、その岩山、まるで巨大なコンサートホール



ドライレイクを後に

も何もないハイウェイを走ることとなった。

のような格好をしている。その形から、様々なものを想像してのドライブもなかなか楽しいものであった。ユタの大地は、こうした小さな山脈と、その山々に囲まれたバレーの大平原の連続であった。そんな大平原の真ん中にユタとネバダの州境があり、ここにボーダーモーターがあるという。果たして、この何もないところにモーターなどあるのかなと思いきや、これが、この世界のなかにたった一軒だけで村を作っていたのである。そして、これから先、この日の宿泊地 Ely まで 50mile

この日の工程

Lehi → Salt Lake City → Riverton → Elberta → Eureka →
Delta → Border line → Ely

この日の走行距離は、352 mile でした。

アメリカ西部一人旅

四日目

Ely (Nevada)～Bishop(California)

Ely という町は既にネバダに入っている。これだけでも随分遠くに来た感じ。今日はそのネバダを横断し、カリフォルニアに入る予定。時間は、ネブラスカのアメリカセントラル時間帯で管理しているので、朝の 7:30 に出発。走るコースは、Atlas の地図に loneliest road と書かれたハイウェイ 50。

この道を今日はただひたすら西に走る。Ely の町の標高がどのくらいか分らなかったが、とにかく、息苦しい感じがする。かなりの高さらしい。ここから、いくつかの低い山並みを突っ切る。Eureka という町まで、72miles。その間に、Robinson Summit 7588ft, Little Antelope Summit 7438ft、Panacle Summit 8521ft を超えて行く。この峠を



羨ましいねえー。ツーリング族だよ。Ely で越えるたびに、広大なバレーが広がっており、まさしく、この大地を独り占めの感じで走る。寂しい道というから、ここを走っている間にどのくらいの車とすれ違いか数えてみた。結果は、三人のモーターサイクルのツーリングをしている人たちを一台と数えて、なんと、十台の車にすれ違っただけだった。なんと7マイル走ってやっと一台の車にすれ違いという計算だ。それでも、この広大なバレーのなかを走る高速は、ただ、ただ、まっしぐら。



これが、Loneliest Road 50 号線

その距離は、十マイルくらいは楽にある。これを、ハンドルをほとんど操作することなく、走るのである。ついついスピードが出るというもの。ここを走る車の数からして、たとえスピード違反の車を捕まえても、走っている車そのものがすくないのであるから、こんな効率の悪いことはない。となれば、パトカーもまず、いないだろうということで、制限速度 75 マイルのところを 85 マイルと突っ走る。なんと気持ちのいいことか。でも、大自然のなか、対向車もないところでは、まったくスピード感がない。



Nevada に入り、かなり得意気。

Austin ~ Fallon

New Pass Summit を超えたところで、ハイウェイからかなり離れているが、塩のベースが



こなな峠を幾つも越えていきました。

み、こちらの崖の中腹で細々と生活していた、そんな情景が目に見えて来る。こうした場所には、どこにもプエブロという古代人の住居がある。これが町の名前にさえなっているところが



またしても塩でした。まさか、あの塩原を突っ切るのでは？
でも、それが現実となりました。

顔を出す。ここにも、ドライレイクがあり、感激。よくよく地図をみれば、このあたりあちこちにドライレイクが散在している。ということは、大昔はこのあたりも森林が茂っていたということか。そのなかを恐竜が闊歩していたわけだ。人間なんて小さな存在で、強大な恐竜達に追い掛け回されて、あちらの山に逃げ込



ある。
実は、
これは、

なんだ、あの白い筋は。これがドライレイク
の塩でした。

崖淵の中腹に自然が作った洞穴や窪みを住居にし

たもの。第一に野生の動物からの攻撃を守り、洪水に耐え、そして、暑さ、寒さという何よりも自然の厳しいし気象の試練に対応したもの。この洞穴、決して小さなものではない。とにかくスケールの大きなアメリカの自然。ひとつの大きなビルが入るくらいのこんな洞穴がドライブしているときにあちこちの崖で見かけるのである。

ところが、Fallon にかなり近づいたところで、ここにもドライレイクがあった。ガイドブックには、Sand Mountain と出ている場所である。この砂山ばかりを気にして車を進めていたのだが、峠を越えたところで、その下に塩の大平原が広がっているではないか。しかも、それまでのドライレイクは、ハイウェイからすこし離れたところにあり、その塩のごく近くまで行くことはなかったが、この Carson Lake のドライ



レイクでは、その塩のなかにハイウェイが突っ走っているのである。遠くから見たときには、まさか、まさかあの中を突っ切るのでは、ひょっとしてあそこは、地盤はしっかりし



これが有名な Sand Mountain

ているのだろうか。あの広さの中で、車が故障したらどうしようかなどと心配の種が頭に浮んできて、ドキドキしてしまった。やがて峠を下り、ハイウェイはまずそのレイクの淵を走る。その広さに度肝を抜かれていると、こんどはその塩の平原と反対側に大きな砂山が見えた。これもなかなかすごい。流石に名所となっているだけのことはある。その砂山の周りは、アメリカ人が楽しみにして遊び、

ATV という四輪の荒地を走り回る娯楽車の遊び場となっている。砂山までの急なのぼり、

そして、その回りにできた岩がごろごろした平原。こんな地形がもうもうと砂煙とたてて、この車で走りまわるにはもってこいの場所なのだ。とにかく、この車道なき道を走り回るところにその醍醐味があるのだ。ひどい連中になると、これで、車がひっくり返る寸前まで挑戦するのである。アクセス道路の途中にここで、遊ぶには、入場料が必要とあったが、係官がいるわけではない。それでも料金は、一週間単位で支払うと説明してあった。バケーションを一ヶ月くらいは平気で取るアメリカならではの感覚だ。この砂山、想像するに、今はドライレイクとなっている Carson Lake の湖畔の砂がドライレイクとなり、その後の長い間、風に運ばれてここに堆積したものではないか、そんな気がした。砂山に上るほどの元気もないので、ここは、ATV 車で楽しむがたがた道をすこし味わって直ぐにハイウェイ

イにもどる。そして、こんどは塩の大平原のなかを突っ走る。両脇とも真っ白な塩の原。気持ちのいいことこの上なし。それにしてもその広さのすごいこと。遙かかなたまで、この塩の原が続いている。そう思っただけで喉が渇いてくる。何マイルも何マイルも続く、この道、よくよく見たら、クリークがあり、そこに水が流れていた。水が全くないわけではなく、今でもこうしてかつての名残があるわけだ。そんな流のなかに小さな池がぼつんぼつんと散在していた。驚いたのは、この池の色が真っ赤なのだ。アメリカをドライブしていて、南部に行くと、山の肌が赤い地方がよくある。地球の長い歴史のなかで、ある時代に堆積した地層に真っ赤なところがあるが、これも、酸化鉄か、何かのイオンが溶け込んでいるのであろう。見事な赤色の水の原因をあれこれ考えながら走っていたら、この長い一直線のハイウェイをサイクリングしている若者とすれ違った。この若者、これから一



ハイウェイが塩のなかを突っ走っています。

体どこまで行くというのだろう。これまでドライブして来た距離からしても、今日は、野



Lake Tahoe のリゾートロッジ

宿を覚悟しているのではないかと思うほど、

この道、途中に何もないのである。まあ、そんなことにも挑戦できるのは、若さの特権か。

このドライレイクの名前が由来したのか、直ぐさきにネバダの州都となっているカーソン市がある。この町、直ぐ後ろに裏山が迫る、土地の条件も対してよいとはいえないような場所であるが、なぜかここが州都になっている。まちには、政治の中心らしく、ステ

ーツのキャピタルハウスもあるし、コートハウスも目を引いたが、山に囲まれて小さな町。ところが何でここにこんなに人が集まっているのか不思議でならない。それに比べ、直ぐ近くのタホ湖は、避暑の人、人でゴッタ返していた。目を見張るばかりの豪華で、立派なロッジがところ狭しと立ち並んでいる。サンフランシスコやサンノゼあたりの町から沢山の人がバケーションに訪れるのであろう。レイクに近くまで行こ



Carson City の Capital House.

うとしたが、なかなか入り口が分らない。結局、入ったロッジがマリーナに入る道。ここで、ゲートがあり案内し

ている若者がいた。ここに来た目的を聞いている。その目的に応じて、車をどこに止めたらいいいのか教えてくれる。写真を撮りにきた。といったら、その駐車場に止めろ。30分は無料だという。こんなサービスこれまで経験したことがない。なんと気の聞いたサービスかと感心した次第。

レイクタホから、カリフォルニアにはいり、南下するには、山をひとつ越える必要がある。89号線であるがこの道路、山道でローカルなハイウェイであるが、スピード制限は、65マ



イル。車はほとんど通らないが、タホからずっと後を着いてくる車がいた。こちらがスピードを出せば、これにしっかりとついてくる。というわけで、この車としばらくチェイスをたのしむ。こちらは一人乗りだから、登りで随分差をつけることができたが、くだりになると直ぐにおいつかれてします。景色を楽しみながらのドライブをしているので、峠で写真をとるのをきっかけ

に先を譲る。

こんな風景の連続

Mountain Pass という峠がある。山の上を走るハイウェイだがこちらは山登りを急激に上るのではないのでなかなか高さを感じることはないが、この峠の標高が 8,314ft, 2,500 m である。峠で車を止めて緑溢れる山々の新鮮な空気を胸いっぱい吸えば、とてもすがすがしい気持ちになる。さて、そろそろと思い、車のエンジンをかけたら、どこからとも泣く、白い蝶が車に舞い込んでいる。この訪問者、「ここで知り合いになれたのだから、車に乗せて行ってよ。」、いう感じ。なかなか車から出ようとしない。こんな出会いが山岳ドライブにはあるから楽しい限り。蝶との別れを惜しみながら、こんどは、くだりの山道。時々見える眼下のバレーを楽しみながらさらに 395号線に向かう。

395 号線 素晴らしいシーニックドライブウェイ





395 号線。素晴らしい景色の始まり

この 395 号線は、ネバダの州都カールソンシティと、ロスアンゼルスを結んでいる主要な幹線道路。カリフォルニアとネバダの州境の山々と、カリフォルニアがわのシエラネバダの山々との間に挟まれたバレーを南北に走っている。このバレーの中を川が流れていてその河岸段丘の平らなところにこのハイウェイがあるのだ。右にシエラネバダの山々が、その裾野から山頂まで一揆にそりあがっているのが見える。まるで、足元から素晴らしいスタイル、そして、その美しい顔までまじまじと美人を目の当たりに観賞できるという感じで眼前に広がるのである。これが、一つや二つではなく延々と続くのであるから気分は最高。多分、ミス・インターナショナルコンテストの審査員もこんな感じで楽しんでいるのではないかと想像するほどである。こんな素晴らしい道路を何時間も走るのであるから、まさにここは、シーニックドライブのコースとしては天下一品という言葉がぴったりである。だが、だが、アメリカの自然は、そんなもんじゃないというのがこれから毎日続くとは、この時は予想だにできなかった。それでも、この壮大な、そして、崇高ともいえるような山々のその威容、これをただ 1 人で楽しむのは申し訳ないような気がしたが、鼻歌交じりにここを飛ばしていた。するて、どうでしょう。この私の車の横を悠然と追い抜いていく車がある。最初は何の気なしにしていたのだが、よくよく見れば、これがまた、あの昔懐かしいカブトムシ。息子の善也がとても気に入って暫く乗り回していたもの。そのスタイルがいい。しかも、白地のボディーに、黒いホローのついたものだ。こんな古いマニアックな車を乗り回して楽しんでいるアメリカ人は一体どんな人かなと興味が湧いて、これを追いかけてみた。と、なんと抜いたフォルクスワーゲンを運転しているのは若いお姉ちゃん。サングラスをかけて、いかにも、老人なんて相手にできないよというような雰囲気得意気に運転しているようだ。暫く、併走していたが、二車線を故意に塞ぐことはできな

いので、先を譲る。と、そのあとにこんどは、彼女を乗せた若い男性が運転する車がこのワーゲンと併走する形で、ハイウェイを飛ばして走り始めた。こちらも、興味半分、その二台のあとをつけて三人でおいつ追われのドライブを楽しむ。スピードは 80~85mile、時に 90mile までスピードを上げる。これ以上だと、スピード違反で危ない。ぎりぎりのところだ。あの古いワーゲン、登りはかなり苦しそう。でも、下りになると抜かれた分をすぐに取り戻し、すぐに追いつく。こんな調子でハイウェイのドライブを楽しむことができる。とにかくこちらの道路は空いているから。我々三台のほかは、前後数 mile に、他の車がないのである。暫くこんなドライブを楽しんだあと、Conway Summit、ここは、標高が 8000ft、あるが、右には、Pettit peak という山 が聳えている。その高さは、10,788ft、3000メートルを越えている。そして、この峠を過ぎると突然、眼下に塩の岩を作った湖が広が



湖の真ん中に、塩の島が。

っていたのである。湖の名前は、Mono Lake と言う。なんと、その湖の真ん中に塩の塊の島ができています。これにはびっくり仰天。全く、アメリカの自然にはどんな発見があるか想像ができない。湖の縁には、その塩の塊が小さな丘のように競りあがっているのが無数にある。とにかく、山を見てびっくり。その下にあるバレーの広大な広さに驚き、そして、水のない湖、塩の原に仰天、山の中に吸い込まれているようなどこまでも真っ直ぐなハイウェイ、ドライブしての刺激は強烈なものだ、

こんな調子でこの日は一日中、度肝を抜かれっぱなしのドライブでした。さあ、明日はどんな調子かなと、胸をわくわくさせながら、この日の宿泊地、Bishop という街に到着。が、実はこの街にも謎がある。景色を楽しんできた 375 号線は、Elevation が 7,000ft になっている。そのハイウェイのすぐ脇に Lake Crowley がある。ということはその標高は、395号とほぼ同じということになる。ところが、そのすぐ先にある Bishop の街は、その 375 号を数百 ft 下ったところにあるのだ。とすると、あの湖は、Bishop の街の裏山の上にあるということになる。こんな危険なことはない。雨でもふれば、たちまちあの湖が洪水となって、その下にある町はたちまちにして水浸しになってしまうのだろうが。長し歴史の中でも、そんなことは一度としてなかったのか。この街、一体、どうなっているのか。

漠然とはしていますが、ちょうど幕末の左幕の志士のように、莫大な背景をバックにした砂漠を楽しんできました。これが、サンドマウンテンをみた感想でした。

Ely → Fallon → Carson city → Lake Tahoe → 89 号線 → 395 号線

→ Bridgeport → Mammoth Lake → Bishop

この日の走行距離は、548 mile でした。

アメリカ西部一人旅

五日目

Death Valley を行く

シエラネバダの4000m級の山々の頂きを見ながら、最高の気分で395号線を走る。



ふもとから、頂上までが一望できるから、山の迫力がじかに伝わってくる。山々をこんな風に楽しめるのは日本ではちょっとない。

Bishop から Big pine 、そして Independence

、Lone pine という街を過ぎる。Lone pine という街、さしずめ、別れの一本杉、いや松というところか。こうした街はいずれもインディアンの保護地域となっていた。この街から見える、Mt. Whitney は標高が14,494ft でカリフォルニアでは一番高い山と紹介されている。この辺りでガソリンを補給するつもりでいたが、この先にも町があるので安心していたら、なんと、その先幾ら



ここにもドライレイクです。

言っても町らしき町がないのだ。運良く、デスバレーへの分かれ道のところに一軒だけガソリンスタンドがあった。Olancho というところ。このガソリンスタンド以外に何も無い

のだから、クワバラクワバラ。ここをでたところでドライレイクが始まる。一山超えて、出現したバレーが荒涼としている。最初は、これがデスバレーかと思ったが、じつは前座に過ぎなかった。こうして、いかにも南国にきた感じの風景が始まった。荒れた土地に一際目だつ植物がある。なんとこれはサボテン。こうしていよいよデスバレーに近づく。デスバレーの入り口で、車が一台止まっている。道路が整備されていて、スピードを出しているの、なかなかこうした案内板のところで写真をとるのは、難しい。



記念に撮っちゃいました。

通りすぎて、折角ここまできたのだから一枚記念にと思い、車を U-ターンさせて戻る。自分で自動シャッターをセットしていたら、写真を撮り終わり、出発しようとしていた一家のドライバー、このひとは女性であったが、後ろ座席に乗っていたご主人に促されて、私の写真を撮ってくれた。これはありがたい。しっかりと記念の写真撮ってもらう。この公園の案内板があったのは、実は、デスバレーに入る高原の上。この高原から一揆にデスバレーに下るのだが、その出発点に View Point がある。そのビューポイントの案内に従い、眼下にデスバレーが望めるところまで車で行ったら、これがまた凄い岩道。四駆で進むのか適当とはこのことか。とにかく、わだちが凄いというより、



眼下に広がるデスバレーです。そうなんです。

岩がごつごつしていて、真っ直ぐ進むと、車体のそこをこすること必至。だから、岩の頭をさけ、そしてくぼみにタイヤを取られないように、狭い道を 90 度にハンドルを切りながら、ジグザグの走りとなる。幸い、崖までは距離があるのでそれほど危険というほどではないが、たかが二百メートルくらいのところを数分かけて車を進める。こうして、なんとか、ビスタポイントに到達。その眼下に広がっているのが本物のデスバレー。これがまた凄い。とにかく海拔ゼロメートル以下である。塩の海、いかにも暑そうに空気の揺らぎ、そして、荒涼として大地。殆どの車は、舗装してあるビスタポイントのところで、デスバレーに刻みこんでいるクリフを楽しんでいる。これがまた、足元から急激に崩れ落ちた崖で、覗きこむのにしり込みするほどである。ビスタポイントから、またしてもあのガタガタ道に苦しんで戻ろうとしたら、も

う一台、今度は、四区のリムジンがやってきた。なかなか勇気のある人だと感心して、運転手をみたら、なんと女性の 1 人旅であった。おっ、これは勇気のあること、と 1 人脱帽した次第。この崖を下りきるといよいよ本物のデスバレーとなる。さすが、噂に聞いたとおり、ここは灼熱の地獄である。なんと、温度計は、113°F となっている。摂氏にして、45 度近くある。まあ、その暑さは説明のしようがない。いかに乾燥しているから、そんなに暑さは感じないとは言っても、とにかく、呼吸をしていると喉が渇くのだ。水分を幾ら補給しても渇きが止まらない。そんな土地ではあるが、かつてはここにも沢山の原住民が生活していたとのこと。その人たちの文化遺産が集められ、展示されているのが **Furnace Creek Ranch** の近くにある **Museum**。ここは、公園事務所にもなっており、ここで、年間の **National Parks Pass** を購入した。一昨年は、50 ドルであったが、今年は、75 ドルとなっていた。今年から入場料を値上がりしたとか。それでも、これがあると、7 月を 2 度使用することができるので、来年も利用できる。ありがたい計らいである。この **Museum** で日本から来たという観光客の一行と一緒にになった。話しによれば、**Wyoming** の **Yellow Stone** に行き、**Death Valley** を楽しんで、あと、**Grand Canyon** , **Bryce Canyon**, **Zion National Park** などを回る 20 間のツアーだという。随分と贅沢な旅行だな。一体どれくらいの費用で



原住民達の生活用品が展示されています。



デスバレー遠眺。

来ているのかなと想像したが、ここは、カリフォルニアからも近いので、日本人には比較的楽しみやすいところかも知れない。

ここには、郵便局があるというので、ここで、絵葉書を出すことにした。切って代が最近、変更になり国際便が幾らか分からなかったもので、職員に尋ねようと思ったら、あいにくこの日は、独立記念日でナショナルホリデー。お役所はお休みである。弱っていたら、そこにある切手売りの自動販売機を見ろと、親切に教えてくれたひとがいた。自分もメー

ルを出しにきたというインディアンらしき人。随

分親切なひとだった。国際使用の切手があったので、料金もそれで十分と考えてこれを貼付することにした。果たして、デスバレーの消印のはがき、うまく届きましたでしょうか。

郵便局のすぐ横に、ゴルフコースがありました。この暑さのなかで、しかも、ここまで来て、ゴルフをやる人がいるのかねと思ったら、それが、いるんですね。なんとも驚きいりました。そのゴルフ場のまわりには南国情緒豊かな熱帯植物が生えており、確かに、ここが尋常な暑さではないことをよく説明してくれました。観光の名所に、「悪魔のゴルフコース」というところがあるのですが、ですから、このデスバレーでゴルフをするということがゴルフマニアにとっては一つのステータスになるのでしょうか。



地層は教材の倉庫。

うことは、これはもう一度ここに遊びに来いと筋書きかなと納得し諦める。その代わり、デスバレーの全貌を高台からみることができたし、この地の地層の変化を存分に楽しむことができた。解説書によれば、このもっとも古い地層は前カンブリア時代のものだそう。黒い地層がこの時代のものらしい。そして、3～5 億年くらい前の地層がパレオゾック時代のも

で、この時代には、ここは海に覆われていたのだそう。その時代の海洋生物の化石が出るという。そうして、5～35 百万年くらいまえの、セノゾイック時代に現在の地形ができたとのことである。つまり、今のわれわれはこうした時代の変化を一度に見ているわけで、こうした場所にくると、あの山は、〇〇億年前のもので、ここにあるこの地層は、何百万前は海の底にあったのだ、そして、あそこにある塩は、その当時の海水が含んでいた塩なのだなど、まさしく地球の歴史の偉大さを感じざるを得ない状況なのである。アメリカ人の子供たちは、両親と一緒に旅をして、こうした体験を自然のなかでごく当たり前に経験しているのである。これほど、楽しい教育のやり方はないのではないか、と実に羨ましい気がした。 たっぷりとデスバレーで、地球の歴史の深さを感じ、Shoshone という町から、ラスベガスに入るためのインターステーツ 15 号線に向かう。不思議なことは、ここに Shoshone という町があること。本来なら、Shoshone 族はもっと北のアイダホ辺りにいた

外の空気が熱くて、とにかく窓を開けては走ることができない。そんなデスバレーを経験しながらのどらいぶ。途中、悪魔の川という標識があり、本来ならここを通過して、海拔下の平原を体験するつもりでいたが、何の拍子かナビの言うとおりに走っていたら、一端はここに入ったのだが、遠回りになるとのナビの判断で、残念ながら貴重な体験をするチャンスを逸してしまった。





何万年の堆積層が褶曲した地層。

また次回の宿題であるような気がする。**Baker** という町で **I-15** に入るのだが、その寸前にはドライレイクがある、これもなかなか大きなものであるようだが、すでに、昨日からそのドライレイクのすざましきは存分に味わっているので、ここではたいした感激はなかった。インターステーツに入り、広い中央分離帯はさすがにという気がしたが、驚いたこと



Shoshone から **Baker** へ行く途中の名もないクリフ。

るダム、フーバーダムを見に行くことだった。ここは、ルーズベルトが苦心の末に考え付いたダイ事業で、コロラド川を堰きとめて大きなダムをつくり、電力の確保と、職場の確保という意味で歴史に残る事業となったところだ。中学生時代だったと思うが、そんな背景を教わったことがあるので、それを実際にこの目で確かめなくてはとの、熱意から、すこし予定より遅くなったが、**Boulder** という町に行く。ここからはすぐ先であるが、ここに

はずであるが、 たつぷりとデスバレーで、地球の歴史の深さを感じ、**Shoshone** という町から、ラスベガスに入るためのインターステーツ 15 号線に向かう。不思議なことは、ここに **Shoshone** という町があること。本来なら、**Shoshone** 族はもっと北のアイダホ辺りにいたはずであるが、ここにその名前があることは何かのいわれがあるような気がする。しかし、それを探るような手がかりは今回を見つけないことができなかった。これも、

にこのあたりの中央分離帯には、草も生えていないという状況。よほど水が乏しいと見える。生えているのはサボテンばかりです。カリフォルニアは豊かな州と聞いているが、人が沢山いて賑わっているのは、本当に僅かの西海岸にそった場所くらいということか。州知事をご存知、シュワルツネッカーである。この日、ラスベガスに入る前に立ち寄るところがあった。それは、1929 年の世界大恐慌の時に、失業した労働者に賃金確保のために始めたといわれ

行くのに車の安全チェックがある。さすが、テロに敏感になっているアメリカ。ことが起きてからでは襲いと嚴重な警戒をしている。そんなことで、ついつい気が焦り、車を先に

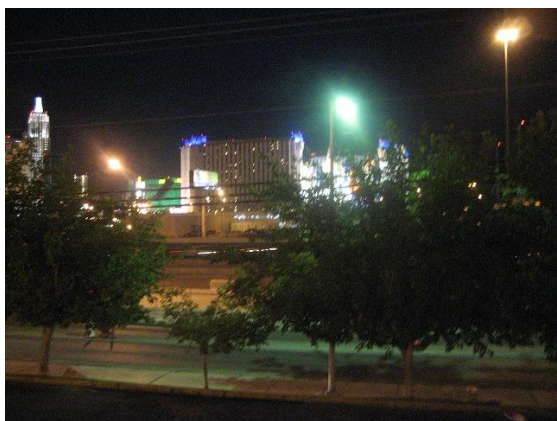
これが有名な **Hoover Dam** です。



ビジターセンターの中に止め、歩いて見学をすればよかったのだが、とにかく、ダムを走りたいとの一心から、先にアリゾナ側に渡ることにした。そして、ダムの上流側をじっくりとみて、今度は、ダムの下流側を見ようと、ビジターセンターに車を入れようと思ったら、すでに、閉鎖となっていた。五時を数分過ぎていたのである。ここの見学には時間制限があるとは聞いていたが、ネブラスカから時計はずっとセントラルタイムで管理していた。それが、マウンテンタイムとな

り 1 時間遅れ、そして、カリフォルニアではパシフィック時間となりさらに 1 時間遅れるので、このときには実際、自分がどの時間帯にいるのか定かではなかったのだ。というわけで、目的のフーバーダムは、その上を走りとおしたということで終わってしまった。

ここから、今日の宿泊地ラスベガスまではごく鼻の先という感じであるが、見知らぬ土地、ホテルの探すのは、これまでだとルートを頭の中にいれ、さらに通りを探しながら、必至



ラスベガスの高層ビル。



にたどり着くのであるが、今回は、ナビが大活躍。大都会のなかのモーター探しも、殆ど間違

いなく案内してくれる。アメリカの都市は、中心を外れるといきなり砂漠のような状況もしばしば。そんなところをドライブしていると本当にこれで大丈夫なのかと不安になってくるのであるが、その点、ナビに任せておけば、まずまずは大丈夫という感じ。今回のラスベガスの宿は、町の中心から極僅かに離れたところ。ただ、以前から聞いていたように、カジノのある町のホテル代はそれほど高いということはなく、むしろ、安いホテル代で十分に遊んでもらい、たつぷりと損をして、その分、町に金を落としていってもらうという

のが行政の姿勢だとよく聞いた。このモーテルの場所、そして、値段を考えると、そんな考え方もしたりというような気がする。

デスバレーの凄さ。ですからどうなるのですか。
自然をたのしむのもなかなか苦勞がいります。

この日の工程

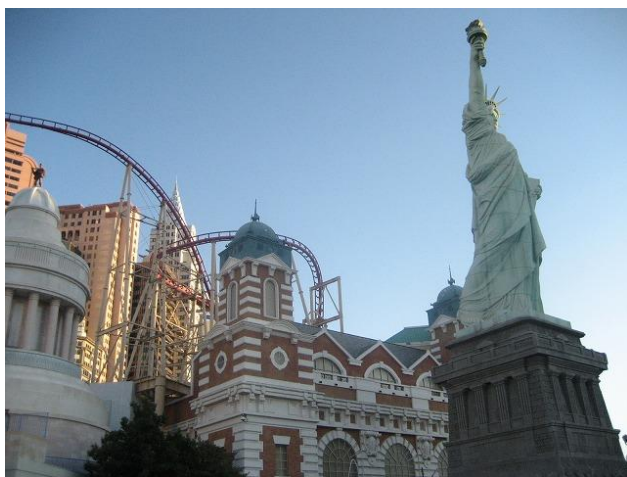
Bishop → Olancha → Stovepipe Wells → Funace Creek →
Death Valley → Shoshone → Baker → Hoover Dam →
Las Vegas

この日の走行距離は、451 マイルでした。

アメリカ西部一人旅

六日目

感激のプライスカニオン、そして、驚愕のザイオン

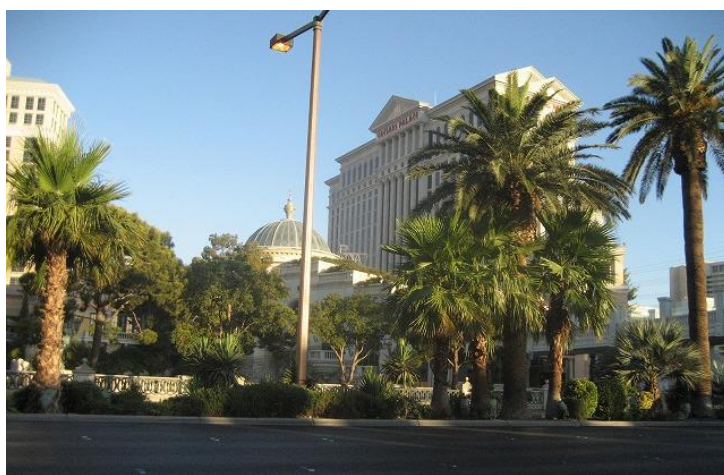


何だこれは、自由の女神ではないか。

独立記念日、ネオンのラスベガスを楽しむ予定であったが、疲れのためか、ビールを飲んでぐったりという感じ。結局、そのまま寝込んでしまったので、この日、早めにおきて、朝のラスベガスをチェック。メインストリートをドライブ。が、流石、朝というのに、すでに、町には、夜の活気がそのまま感じられる。とにかく、レジャーランドラスベガスは健在。迫力が違う。ここに泊まって、ギャンブルをするのがア

メリカ人、否、世界中の贅沢者の最高の時間つぶしなのだ。

St. George の町を通り過ぎ、Cedar の町へ。ここからプライスカニオンに入るのが通常の経路であるが、時間に余裕の



朝だと言うのに、もうギャンブルの匂いが漂っている。

ある人は、途中 14 号線からわき道の 148 号線に入るように案内している。なぜなのかその理由はいってみないとわからない。14 号線から少し山道を登るような格好になる。標高も大分高くなっているようである。それもそのはず案内板には、9800 フィートとある。3000 メートル近い高さだ。しかし、回りには白樺が初夏の緑の成長の時期と相俟って、瑞々しく輝いている。そんな中を時速 65mile で飛ばすのであるから気分爽快この上なし。するとここに、ブライスカニオンの前座とも言うべき、キャニオンが展開している。まだブライスカニオンそのものを見ていない者にとってはこれがまた強烈な印象。山がえぐられてそこに広大な自然の彫刻の世界が天界しているのである。こうまで大自然の創造は、独創的なのかと思わせる。まるで、台地に刻み込んだ緻密な彫刻そのものである。この山肌の色は赤みが掛かっている、それが余計朝日に映える。



ここから、しばらく、高原ドライブと、この芸術鑑賞が続く。やがて標高は、10000Ft とでてきた。なんと、3000 メートルの標高の台地の上を、高速ドライブしているのである。外は空気も大分薄くなっているようだ。時速 65 マイルで飛ばす車も楽ではないようだ。こうして、ブライスカニオンの前哨戦とも言うべき、このセダーのキャニオンで目を慣らし、いよいよ、ブライスカニオンへ。

このブライスカニオンも、セダーキ

ブライスカニオンの弟分、セダー・ブレイク

ャニオンと同様、大きな山の西側だけが雨風に削られて、壮大な自然彫刻の展示場となっているのである。セダーのほうは、溪谷が三つくらい削られてものであったがこちらは、十以上の溪谷が削られているほどのスケール。最初にビジターセンターで案内をよく見て、それから、これらの彫刻の溪谷を上から見下ろすようなビューポイントに出かける。いく



ブライスカニオンの見張り役たち。

ブライスカニオンへのアクセス

つかあるビューポイントのうち、まずはサンセットビューに向かう。沢山のビューポイントを全部回るのは時間がかかるので、こうしてビューポイントを選んで見て回るわけだ。そして、次に、一番奥にあるレインボービューポイントまで車を走らせる。その距離が 14 マイルもあるのであるから、まさしく車

を走らせるという感じだ。なんとこのレインボウのビューポイントまで来ると、ブライスカニオンの全体が把握できるから、これは、とてもよい観察となった。このブライスカニオンは、ここ、ブライスカニオンを含め、ユタからアリゾナにかけては沢山の地層が重なっている。またアメリカ大陸ができていなかったころは、この辺りは海の底だったのだ。それが、地球のプレートテクトニクスによりアメリカ大陸ができるときに褶曲をし、陸地が盛り上がった。その褶曲した所は、やがて削られて、平らになるが、その削られたところに沢山のクリフ、どこまでも続く台地の端にできる崖なのだ。 **いよいよ、ブライスカニオンの入り口。**



この崖にはその堆積した時代により様々な名前がつけられている。一番古いのは、チョコレートクリフ。そして、バーミオンクリフ、ホワイトクリフ、クレイクリフ、ザイオンの崖はこの時代のもの、そして、ピンククリフというのが一番新しい、ブライスカニオンはこの地層にできたものである。台地ができると、雨水により侵食が始まるが岩の硬いところがのこり、柔らかい土が洗い出される。そして、その硬い岩が保護して、その下の土が削られずにのこり、長い年月の間に塔のようになって自然の芸術品を作るのである。だから、地層が同じ年代のところに同じ様な形のものができるのである。高さ、大きさ、くびれ、などなど、まことに似通ったものが無数にできるから不思議だ。それが、このレインボーポイントにくるとよく分かる。しかも、ブライスカニオンも、セダーキャニオン、

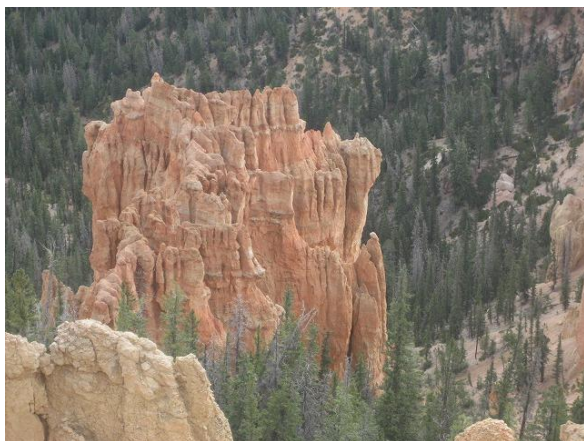


これが、ブライスカニオンだ。

正確には、セダーブレイクスと呼ぶようだが、山の同じ側の斜面にでき、しかも、幾つもの谷を越えて、同じ様な形でできるから、これもまた自然のいたずらにしては度を越している。土を削られてところは、白い地層の世代のものと、赤い地層のものが交互にしかも、御互いを強調しあうかのように、色づいているから見ていて飽きることがない。それに、この地層には樹木が生えることはないが、それでも、長い間に、そのそこの台地に僅かながらの松が根

をつけ、この時期、生き生きとした緑の葉を芽吹かせていた。その緑がなんとなく荒涼とした感触を与えるこの白と赤の色合いの中に混じって、幽玄な世界に彩りを加えていたの

が、印象的であった。上からみていたら、岩の塔をまるでドミノ倒しのように整然と並べ、迷路を作っているようなその中をトレイルしている人を何人か見つけた。たっぷりと時間があり、体力さえあれば、あんな楽しみ方ができるのにと羨ましくて仕方がなかったのは自分だけではないだろう。それほど、このブライスカニオンの岩の塔の魅力は素晴らしい。



見事、ブライスカニオン。

緻密とも言うべきこの自然の彫刻の素晴らしさに驚き、ブライスカニオンの姿をまぶたに焼付け興奮さめやらぬ思いで帰りの途についた。

この日、宿は、明日の朝できるだけ早く、ザイオンの国立公園に入る必要があるので、St. George という町に宿を取った。その町に帰るには、朝の 14 号線を引き返す経路と、ザイオンのなかを通る経路がある。時間は前者のほうが早い、明日の下見ということもあり、この日の帰り道にザイオンに寄ることにした。

ブライスカニオンの帰り、89 号線から、Zion Mount Carmel Highway と呼ばれている



Zion へのアクセス道路。

このレインボーポイントにいた時ににわかには空が荒れ始め、強烈な風が台地を襲ってきたが、溪谷となっているこのブライスカニオンのなかの松林は少しもその風に揺られることがない。なるほど、これなら、あのいかにも繊細ともいえるような形をしている沢山の塔も、風で飛ばされることもないし、また、砂煙が巻き上がることもないわけだ。なんと自然の調和の偉大な力かという気がした。ただ、ただ、この



この素晴らしさ、言葉での表現は無理。

9 号線に入る。途中は何の変哲もない快適ななだらかなハイウェイ。この分なら、難なく帰れると思いきや、途中からこれがとんでもない山岳道路となる。ザイオンの公園の中に入るところになると狭い峡谷を切り開いた道になり、今度は、岩のトンネルまでくぐるしまつ。これにはだんだん興奮してきた。何しろ道路の両側

には、まるで車を押しつぶすように迫り来る崖の山である。なにになにこれがザイオンと思
い、夢中の辺りの岩山を写真に納める。その迫力たるもの、1000メートル近くある岩肌が、
見上げると首が痛くなるほど、真上にそそり立っているのである。圧巻は、トンネルをで
たところ。このトンネル岩山を貫いているものだが、途中に明かりとりの岩の窓がある。
三つほどこの明り取りの場所を通りすぎるのだから、かなりの長さのはずだ。そして、そ
のトンネルをでるとこれがまた、崖の上。片方は、高い山の壁、そして、谷川は何百
メートルもの崖である。しかも道幅が狭い上に、谷側にはガードレールはない。ところ
どころやはり、スピードを出しすぎて飛び出してはあの世行き、これでは危険と石
垣が詰まっている、しかし、それとて、高々、10 インチくらいの高さだ。下手をすると
勢いあまって乗り越えてしまう。そんな道を何度も何度も U-ターンをして行くので



Zion へのトンネル。

ある。上るほうはいいかもしれないが、さすがに下る側、そして、その下り線が谷川に来
るときには、景色を楽しむどころではない。やっとの思いで下まで辿りつき、来た道を振
り返り、その岩山の激しさ、高さ、ずっしりとした偉容に改めて尊敬をするほど。なる
ほど、ブライスカニオンは、まるで自然の緻密な彫刻のような気がしたが、ザイオン、
これは荒削りで、生き生きとした生命の息吹を感じさせる男性的な自然の彫刻であるよう
な気がした。これは凄い。見事だ。下手な説明は要らない。このザイオンの岩山を明日
はユックリと見学することにした。

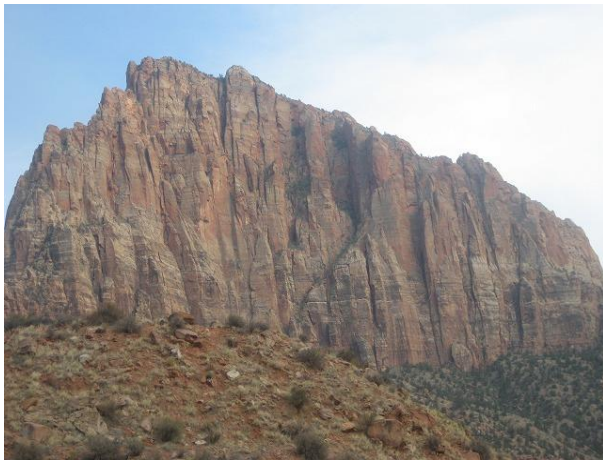


冗談じゃない。この迫力

ブライスが、緻密な芸術なら、このザイオンはまさに質実剛健、そのもの。

自然の織り成す、岩の芸術品に感激していた。なんと、四角いトンネルがある。

このトンネル、トレーラーはすれ違うことができないので、二車線あるが、片道通行をしている。はじめは、面白いという感じであるが、そのうち、このトンネル、かなり長い。それに照明がないのだ。しかもくどりと来ている。ついつい、緊張。やっと明るくなり、いよいよ出口かと思ったら、これが、ただの明り取りの窓にすぎない。そんなわけで、かなりの長い間緊張のドライブ。そして、やっ



と出口。確かに出口。ところが、この出口を出た途端、これが大変な岩山の壁の間。とんでもないところ。360度岩の絶壁に囲まれたところだ。何の気なしに見上げたら、これが、二・三百メートルくらいある岩のそそり立った壁なのである。そしてその岩が今にもここに崩れ落ちそうな感じ。すぐあとにおばあちゃんが乗った車が止まったが、出てきたおばあちゃん、驚いて押しを抜かしはしないかと心配したほどである。

グランド・キャニオンが地球の大地に刻み込んだ大自然の奔放な芸術とするなら、ブライスカニオンは、大地に刻み込んだ自然の緻密な芸術という感じでうる。

この日の工程

Las Vegas → Cedar city → Cedar Breaks → Panguitch →
Bryce Canyon → Rainbow point → Long Valley Jct. → route 89
→ Route 9 → Zion Mount Carmel Highway → Zion → Hurricane
→ St. George

この日の走行距離は、 431 mile でした。

アメリカ西部一人旅

七日目

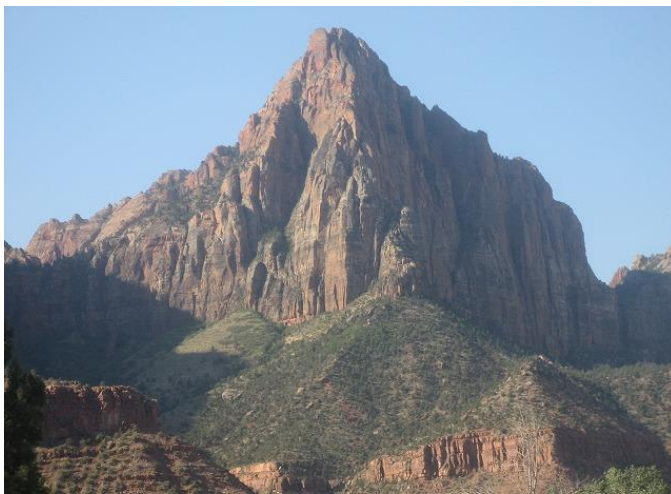
ザイオン国立公園 そして、バーミリオン・クリフ

昨日、思いもかけず、ほんのちょっと下調べをするくらいのつもりで、Zion Mount Carmel Highway を走った。この道を Zion に向かって走ったが、これが正解。じつは、この道、明日、キャピタルループに向かう時に Zion の公園から通り抜けるつもりでいたが、これだと、山を上るかたちになる。そのため走りながら眺める山の迫力が全く違うということに後から気づいた。その刺激があまりにも強かったものだから、この日はどんな風になるのかなと興味津々。本来の Zion の鑑賞は今日のコースとなっているからだ。Zion 渓谷は、非常に小さな川、



その名を Virgin River という これなど、まだ序の口
が、この川が約 2 億年くらいかけ

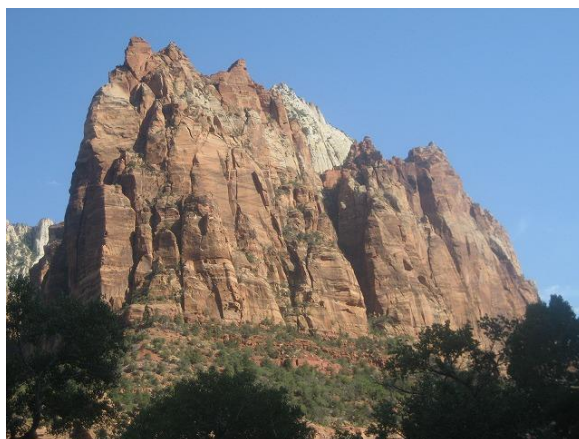
て削りとった渓谷である。小さな川だから、その削れた幅がとても狭い。にも拘わらず、1000m 近くあるからすごい。その凄い渓谷を囲んで、断崖絶壁で 2000m 級の山々がこれを



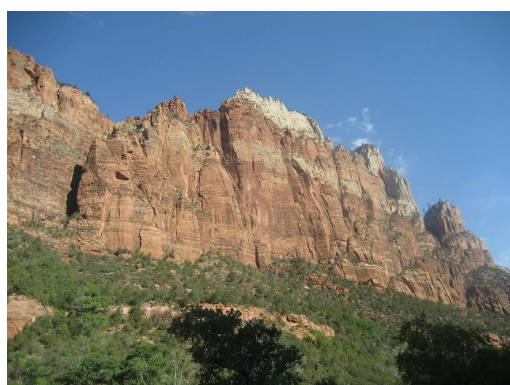
見よ、この勇壮なザイオンの岩山

を守るかの如くそそり立っているのである。実はその渓谷があまりにも狭いものだから、ここに自動車が入り込むのは窮屈だし、自然を保護するということで、ここはシャトルバスで見学するようになっている。このシャトルバスはひっきりなしに走っ

ているし、どこかの国と違って、休みだからといって民族大移動するような国ではないので、結構空いている。ただ、シーズン中は、来る人はみんな自家用車なので駐車場が窮屈するとのこと。それに、今日は、できれば時間の都合をつけて、パウエル湖までドライブしようとの心積もりがあったので、この日、早起きをし、七時にはモーテルを出発。というわけで、朝八時半にビジターセンターに到着。ビジネスセンターから見える岩山が〇〇、その奥に聳え立つのが〇〇、どうぞお見逃しなくなどと、ガイドブックにあれこれ説明が書いてあるが、この景色、驚き入るのに何の説明も要らない。とにかく、どこをみても、というより、どちらを見上げても迫力満点。これが地上に作られた自然の芸術かと思わずにはいられない驚愕の風景。とりあえずシャトルバスでまず、一番奥まで行くことにした。ところが、このシャトルバス、勿論、両サイドの窓は十分に大きく開かれているのであるが、なんと、ここで一役かうのは、サイドの窓よりも天上にある窓。岩山の断崖の下を道が走っているの、横は山の岩肌しか見えない。かろうじて、山頂がまるでお腹の上の頭のような形でチョコットだけ顔を出しているような状態。ところが、天上の窓からこれを覗くと、まるでバスを押しつぶすかのように岩肌が覆いかぶさってきている。その迫力たるや、我々は、まるで岩石の間を這い回るアリを想像させる。



実は、この Zion の溪谷、本当の楽しみは単にシャトルバスにのって迫力ある岩山を眺め



るだけではない。ここに来るアメリカ人は、ほとんどがこの岩山を削り取った **Virgin River** の沢登りを含んだ数時間のトレイルをたのしむ。バスの終点からトレイルが始まり、高さは数百メートル以上ある断崖が迫る、幅、僅か数十メートルしかない小さな溪谷を、横を流れるせせらぎの音を觀賞しながら昇っていくのである。途中、道がなくなり、川の中をトラバースしていくらしい。ヒザくらいの深さだから全く危険はないのだそう

だが、このあたり、夕方、突然雷雨が襲うことがあるらしい。すると、自分の所では雨がなくても、その上流で大雨になると、何時の間にか水かさが増し、帰れなくなることもあるとか。いわゆる鉄砲水なのであろう。バスガイドが、このバス最終は、夜の何時、だから、これに



乗り遅れないように戻るよう注意をしている。もし、間に合わなかったら、次の日の朝の一番は、〇〇。どうしてもというときにはこれに乗るようにと説明している。これには、バスに乗っているもの全員、おもわず噴出してしまう。

Zion を見てきたというには、このトレイルをしないと本当の素晴らしさは観賞できないと言われているが、ここは、時間と体力の余裕がなかったので、ギブアップ。まことに残念

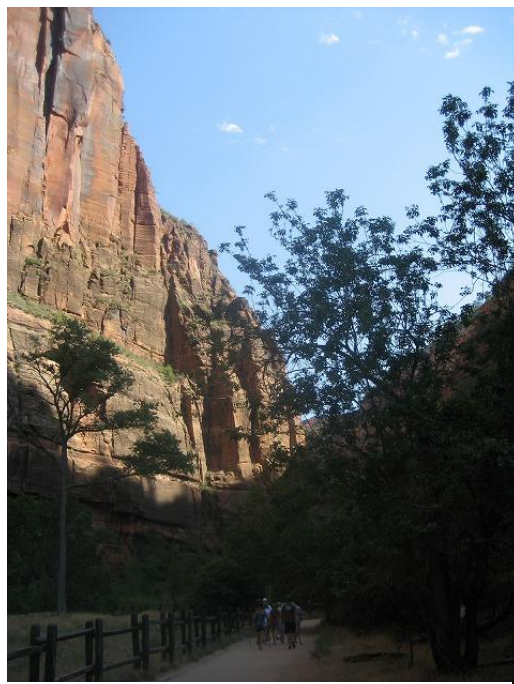


である。一番奥の Temple Sinawava というポイントで、岩山の写真と、たまたま来ていた野生の鹿の写真をとって気納めとした。

ところでこの Zion、下を流れている川の標高は、グランドキャニオンの丁度一番高いところと同じなのだそう。つまり、ここの地層は、グランドキャニオンの上に重なったものが削られているとのこと。標高が

シャトルバスの終点 Sinawava で 4000Ft というのがこの一番下のベースとなっている地層。Kalbab Limestone という地層で、これは、グランドキャニオンの一番上の地層に相当している。そして、この上に、Moenkopi , Chinle, Moenave, Kayenta, Navajo 地層が重なり、さらに、Temple Cap という地層があり、Carmel , Dakota 地層というのが一番上にある。実は、この一番上の Dakota 地層というのが Bryce Canyon の一番下の地層を形成しているのだ。その標高は、およそ 7500Ft。だから、この Zion の削られた山の岩肌の高低差は、3000Ft 位になるのである。これが、たった一筋の小さな川で削られたというから、驚きいる以外に何もない。どんな風に削られたかは、写真をとくと見ていただきたい。

昨日、下りで度肝を抜かれた、Zion Mount Carmel Highway をこの日は逆に昇る。あまりにも強烈な印象でユックリと回りを楽しむことができなかった昨日と比べ、この日は、ポイントでしっかりと写真を撮る余裕もあった。存分にこの Highway の光景を楽しみ、89 号線



この奥にトレイルがある。

にでて、一路パウエル湖のある Page という町まで向かう。ここに行くには、89 号線走りコースと、その迂回路の Alt 89 号線に入るルートがある。その別れ道となっている Kanab

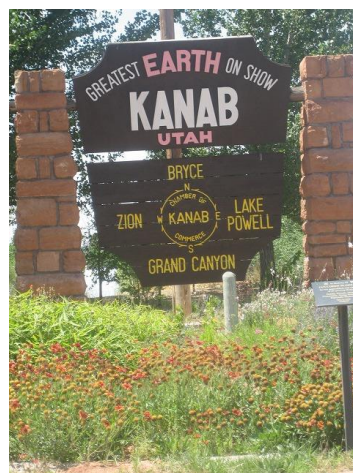


と言う町で、眠気覚ましにトラベルインフォメーションセンターによる。なんの気なしに立ち寄ったこんな小さなインフォメーションセンター、聞いて驚いたのは、実はこの町、西部劇映画の舞台となっているところとか。これまで 200 本近くの映画がここを舞台に作られているという。ジョンウェインの映画も紹介されていた。ハリウッドが日本の大船撮影所というなら、ここは、時代劇の撮影所として有名な京都の太秦というところか。

Carmel Highway.

とにかく、回りに何もなくて、かつての西部の情景を描くにはもってこいの周囲の景色ということなのだろう。言われて、直ぐに、その撮影場所となっているところを見にいったが、何のことはない、町の一角に小さな撮影場所があるだけ。だが、アメリカは、町をすこし離れれば、そこには、どんな荒野でも展開しているのである。湖あり、崖あり、そして、牧場あり、荒れた荒野の中の井戸水あり。こんな条件がここには整っているのであろう。

Page へのルートは南のコースの迂回路を走ることにした。何の理由もあったわけではないが、後でつくづく幸運だったのは、ここが、Vermilion Cliffs の National Monument になっていて、それが、実は、この道路の左側に展開しているのである。KANAB の町を過ぎ、KAIBAB のナショナルフォレストを突き抜ける。そして、この台地を過ぎるとそこには、また、広大なバレーが展開していた。ハイウェイは、丁度崖の下を道路が走っている形になり、その素晴らしい景色を運転席側から存分に楽しめたのは、こちらのルートを選んだおかげ。本来の 89 号線は、崖の上を走っているの、これで



は崖の素晴らしさを観賞することはできないのだ。それにしても、この崖の光景の素晴らしさ。まるで、ザイオン の兄貴分という感じ。Vermilion という地層は、Zion の一番下の地層 と Grand Canyon の一番上の地層との間にある地層で、まさしく、この二つのナショ

ナルパークを結びつける根拠となっている地層なのである。



これが **Vermilion Cliff** だ。

は、ただただ幸運としか言いようがないのである。そんなときは、してやっつりの気分、まことに爽快である。そうこうしているうちにコロラド川を渡る。橋が二つ掛かっている、ハイウェイから、外れ、もう一つの橋から、この渓谷を眺めることが出来る。そして、下を覗いてびっくり。なんと、川の水の色が緑色。何で、と思わずにはいられない。あの、ユタレイクもそうだったし、その水の緑いろにはタダダ驚くばかり。なにせ、岩肌の上を流れる川である。緑の藻が発生しているなど到底考えられることではないのだ。となると、水そのものが緑



その崖がまた凄い。何 mile もの長さ延々と崖が続くのである。その崖の下側を刻々と変わる崖の様相を楽しみながらドライブする。どくろのような岩。高さは五メートルくらいある。何しろ、この岩の日陰でインディアンがおみやげ物の店を開いているのだから。こんな醍醐味は、実際そこにいったものでなければ味わえない。地図にも、また、ナショナルパークの案内にも詳しい説明はない。この素晴らしい景色を楽しむことができたの



ここには、こんな岩がごろごろ。

色ということになる。それには、水の中に緑色の金属イオンが溶け込んでいるとしか考えようがないのだ。

そんな感心をしていながら **Page** という町につく。「おっ。」なんとここに **WAL MART** があるではないか。この砂漠とでもいいたい何もないところに、スーパーマーケットがあるなんて。飲み物、それに、DVD のディスクが不足していたので、こ

れには感激。早々に買い物を済ませ、パウエル湖へ。ここでも、その偉大さに感激。でき



コロラド川の素晴らしい色のコントラスト。

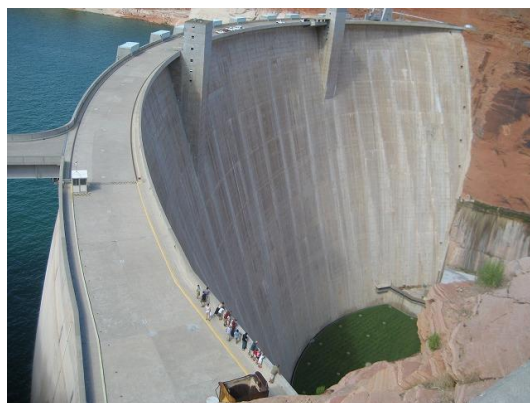
りにも次々にかなりの刺激があるので、ついうっかりしていると、午前中の感激が忘れそうになる。あつと言うまではあるが、内容が豊富で、充実しているので、その整理が追いつかず、逆に記録を辿るにはまさしく長い一日なのである。



反対側から見た Vermilion Cliff の遠望。

た湖は、フーバーダムのものより大きいといわれるこのダム。そして、パウエル湖はここから何十 MILE にもわたって素晴らしい光景のグレンキャニオンを形成しているのである。規模では、グランドキャニオンを凌ぐといわれているが、今回は、ここを訪れることはできなかった。次の機会があれば是非、この湖の回りをドライブしてみたい。

こうして、存分に新しい発見を楽しみ、この日のドライブを完了。行く先々であま



レイクパウエルのダム。

この日の工程

St. Geroge → Zion NP → Visitor Center → Canyon Jct → Carmel Highway

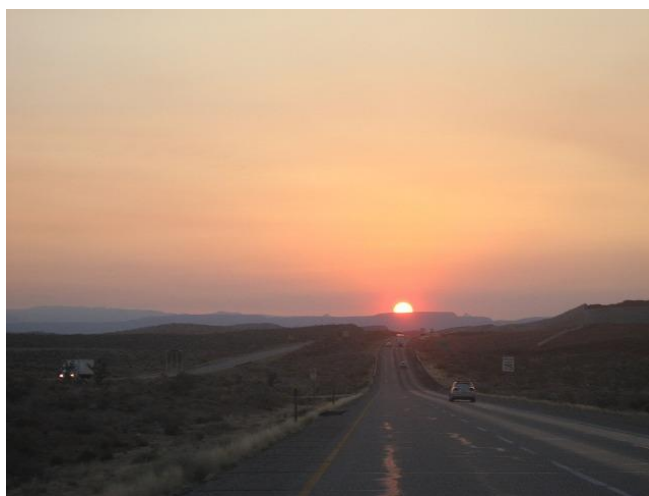
➔ Mount Carmel Jct. ➔ Kanab ➔ Fredonia Marbie Canyon ➔
Page ➔ 89 号線 ➔ Kanab ➔ Washington ➔ St. George
この日の走行距離は、505mile でした。

アメリカ西部一人旅

八日目

エスカレンタキャニオン、そして、もう一度キャピタルリーフ

いよいよ、帰りの行程になりました。この日は、インターステーツを飛ばして、デンバーまで戻るというのが当初の計画だったのですが、どうもインターステーツというのは、時間を節約するのはよいのですが、あまり新しい発見がないし、それにいざというときには車を自由に止めることもできないというので、あまり利用はしていないというのが実情。



I-15 を走り、途中から I-70 に入るルート、これが時間的には早道なので

西部の夜更け。早起きにご褒美

すが、この I-70 号線は、以前にアーチーズ国立公園から、キャピタルリーフに抜けるときに通った道でもあるので、今回、すこし時間的にきついということはありませんが、思い



14 号線。こんな素敵なトンネルをくぐっています。

切ってルート 12 のカウンティハイウェイを走ることになりました。この道もガイドブックによれば、なかなかの名所ということです。しかし、ユタには沢山の名を馳せた国立公園がありますのであまり注目はされていないようです。

選んだルートは、ブライスキャニオンの入り口まで行き、そこから、シーニックハイウェイ 12 号線を走ります。このルートは、北に Dixie National Forest が広がり、そして、南には、Smoky mountain の山々と

Kaiparowits Plateau という平原が広がっているようです。そして、その先には、Glen

Canyon , Lake Powel という公園があるのです。さてさて、このルート、最初、ブライスキャニオンの脇を通りすぎる時には、まあ、その一角にあって、似たような地形と思いあまり期待はしていませんでした。しかし、この考えは甘すぎました。このルート 12 号線に沿って、沢山の地層が変化していくのです。そして、その地層によってできる崖の形が違うのです。最初はまさしく、ブライスキャニオンの片割れのような感じで



不思議な地層のはじまり



したが、エスカレンタに近づくにつれて、その様相がすこしづつ変わってゆくのです。あの繊細な感じのブライスの彫刻が、だんだんあらあらしくなり、ゴツゴツとした岩の彫刻となって行きます。それが、今度は、一段とスケールの大きくなった岩の芸術品となり、やがて山ごとが大彫刻となっていくのです。そして、エスカレンタキャニオンあたりに来ると、これはもう、もう一つのグラン

ドキャニオンという感じ。大峡谷が、眼下に遙か彼方まで広がっているのです。グランドキャニオンほどに激しく、そして、鋭く削られたという感じではありませんが、全体をなだらかに、スムーズに彫刻したというようなもの。白い岩肌の大平原で、その間に松が緑豊かにポツリポツリと彩を加えている状態。この壮大なキャニオンに名前をつけるとすれば、まさに、グレイトキャニオンの名前がぴったりではないか。それほど素晴らしい、大自然の贈り物。そのキャニオンのなかをハイウェイは、時に上り、時に下り突き抜けている。山のビュー



ポイントで車を止めたら、野兎が木陰で何かを食べていた。先にそれを見つけた観光客が、仕切りに指差して、これを教えてくれた。この辺りの野生の動物、たまにくる人間をすこしも恐れないのである。近くまで行って写真を撮っても逃げようとしない。まことに天真爛漫という表現がぴったりなくらい、

マイペースなのである。エスカレンタキャニオンの眺望の利くところはすこし高台にある。下のバレーからすれば数百メートルはあるのではないか。その頂上からの素晴らしい景色を見ようと車を止めたら、なんと、なんと、そこにサイクリングで昇ってきている若者達がいた。さすが、みんなへとへとと言う感じでへたり込んでいる。狭い日陰に伸びているものさえいる。よくもここまで登ってきたものだと感心していたら、なかには若い女の子もいる。リーダーは女性ようで、その助手をしている若者に写真を撮ってもらった。話のついでにどこから来たのかと尋ねたら、「自分たちは、ワシントンからだという。」東海岸のワシントン州である。但し、このサイクリング、「カリフォルニアからバージニアまで 3800mile を走破するのだという。15 日間をかけて、アメリカ大陸をサイクリングで横断し



ようというのだから、この計画の壮大さ。これに挑戦するその心意気が嬉しい。いかに自転車の性能がよくなったからといっても、この大陸のただっ広さ、それに、決して、全行程が平坦というわけではない。標高差が 1000m 程度の山脈は絶えず乗り切って行かなければならない。おお、なんと、そのすざま

しいほどの挑戦意欲。頭が下がる。日本では、鹿児島から稚内まで行き、帰ってくる距離が 4000 キロ、3800mile は、6000 キロだから、その一往復半ということになる。なんとまあ、その計画の大きくて、夢のあること。アメリカの青年は、途轍もない大きなことに挑戦し、その間に地球の歴史の偉大さを勉強し、自然のありがたさを肌で感じ、こんな風に苦しみを乗り越えて自分の人生観を形成していくのかと思うと、羨ましくも、ねたましくもあるが、そんなことは吹き飛んでしま



うくらい、気分爽快な計画である。その若者にカメラを向けたら、気軽に手を振ってくれるあたりがすがすがしい。その若者が、ふと私のナンバープレートを見て、「おっ、ネブラスカ。ネブラスカはどこですか」と聞く。リンカーンだと答えると、そこには自分のペンフレンドがいるといった。なんと世の中の狭いことか。学校の名前を聞いて、あとで確認



したら確かにそのハイスクールはあるといった。それだけでも、その若者と友達になれたような気がするから愉快、愉快。



気分をよくして、この頂上を走りぬける。ハイウェイではあるし、また、山の頂を連ねて走っているの道は狭いもののかなりスピードを出せる道だ。しかし、暫く走って気が



ついた。なんと、右も左も路肩のすぐ脇が崖になっているのだ。少なくとも 200 メートルくらいは下まで崩れている。馬の背のハイウェイを走っているのだ。気がついたら、ガードレールなんていうものはない。まさに冷や汗ものである。

Boudler の町から Glover まで行き、今度は、キャピタルリーフに向かう。ここは一昨年に来たところ。実に懐かしい。なんとなくその雰囲気が蘇るから、それだけ印象が強か

ったのかも知れない。またしても、岩岩岩の連続。そして、崖がその後ろで、奇怪な形をした人形を引き立てている。Temple, School, などという名前がついている。なんとなくそんな雰囲気が伝わってくるから、本当に昔の人の想像性には感心する。懐かしい岩肌を十分に観賞。そして、キャピタルリーフを抜けると回りの風景が一変する。あの色とりどりであった岩の色が、今度は灰色一色になるのである。岩の侵食のされ方も、たてにさくつと気持ちよく裂かれたように割れたキャピタルリーフのものと違い、なんとなく、どんよ



りと削られている。何か岩が意味あり気に抵抗しているような気がするのだ。はっきり言って、その姿は異様。気味が悪いほどだ。というのも、この辺り、冷戦時代、ウラン鉱山が盛んに開発されたところ。今でもその名残はあるが、なんとなく、人を寄せ付けない感じは、そんな歴史的な背景があるのかもしれない。くわばら、くわばら



と、今度は、Hanksville という町から 44 号線を真っ直ぐ北に向かい、インターステーツ 70 を目指す。ところがここがまた思いがけず、広大な枯れ草の大草原。そして、そのいたるところに、あのモニュメントバレーを思い出させるようなタワーが立っているのである。一体、このアメリカはどうなっているのだと、信じられない光景。この道、44mile ほど、殆ど真っ直ぐでこんな状態が続いている。車の数は少ない、前後 10mile くらいは他に車がないのだ、それに、見晴らしの効くこの大平野。というわけで、ここはスピードは出し放題。時々、90mile くらいをだし、眠気を覚まして、また、85mile で走るという状況。

こうして、すこし遠回りをし時間を食いすぎたが、これでインターステーツに入り、デンバーに向かう。ロッキー越えはあるが、遅くなってもナビがあるから大丈夫だろうと、とにかく、辺りの景色を腹いっぱい詰め込んでのユタドライブとなった。

この日の工程

Las Vegas → Cedar city → Cedar Breaks → Panguitch →
Bryce Canyon → Rainbow point → Long Valley Jct. → route 89
→ Route 9 → Zion Mount Carmel Highway → Zion → Hurricane
→ St. George

この日の走行距離は、 431 mile でした。

アメリカ西部一人旅

九日目

デンバーから、なつかしのリンカーン

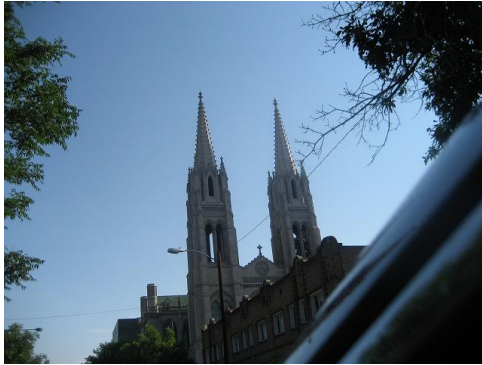


コロラドのキャピタルハウス

とうとう、この日で今回の旅も最終日となりました。リンカーンを 6/30 に出発して、今日は、7/8。

デンバーは何度も訪ねたことがありますが、今回の帰りの行程は、おとなしく、インターステーツを乗り継いで戻ることになりました。少々旅の疲れがあることと、明日からは予定通り会社がありますので、今日は無理はしないということです。

デンバーの町の朝をすこしドライブ。キャピタルハウスを目指し、ダウントウンに入る。ナビのおかげで、右折、左折がややこしい町なかも、難なく走ることができる。こうした初めての大きな街を走るのに、これほど心強い味方はない。とりわけ、一方通行で左折の時には、レーンをどこで変えたらよいのか迷っているうちに交差点を過ぎ去ってしまうこと



もしばしば。それを、このナビは、後どのくらいで左折するか予告してくれる上に、車線を左に取れというところまで指示してくれる。こちらは、例え行過ぎても、また、しっかりとガイドしてくれると思って、ますます気楽になる。リトルロックにいったときなどは、すぐ先にモーターがあるのに、暗くなって通りの名前を読めないし、また、車を止めて地図を見るのも難しい、道を聞くにも、通りを歩い

ている人がいない、往生した挙句、三度も車を店の駐車場に留めて聞き歩き、結局、二時間くらい町中をぐるぐるまわり、やっとのことで辿りついた苦い経験もある。今回はソールトレイクで、入力を間違えて、オーバーランをした以外は、全く問題なかった。その威力



にたよれば、大都会のなかも行きたいところに間違いなくたどり着けるので、本当に今回は役にたった。アトラスの地図も全体を把握するために見る程度で、これまでのようにいちいちめがねをはずして、地図に食い入るように調べる必要がなかったのは、随分精神的に楽であったような気がする。あり難い旅の武器だ。そのナビを頼りに、デンバーの町をぐるぐるまわった。それでも、しっかりとどこでインターステーツに乗ればよいかをきちっと教えてくれ、町中を十分に楽しん

だあと、難なく、帰りの途につくことができた。

これまでは気がつかなかったのだが、デンバーから、ネブラスカとの州境までが、実は200mileもある。コロラドの山の裾野に広がる丘陵地帯。このあたりはトウモロコシも育た



Kearney の アーチ博物館



Fort Cody のみやげもの屋

ないよう
うで、
まわり
は牧草
だけと
いう感
じ。そ
れが、

200mile も続くのだから、これは、少々退屈というもの。およそ3時間を要してここを走りぬけるといよいよネブラスカだ。州が変わると、ここはプラッテ川というコロラドの水を集め、ネブラスカの台地を横断してミズーリ川に注ぐ大きな川がある。このため、ネブラスカに入った途端に緑が俄然多くなる。美しい緑豊かな大地は、その奥に希望が目に見えてくる、そんな感じのコロラドからネブラスカ入りである。ネブラスカに入れば、ここはそれこそ、何度も行き来したインターステーツ。それでも、西の方になるとチャンスは少なくなるので、どこかで土産物屋によることにした。つい先日のサンクスギビングデイの時に、ネブラスカの西を走り回り、その帰りに立ち寄ろうとしたが、あいにくナショナルホリディーで休みだった、フォルト・コディーに立ち寄ることにした。ここは、ノースプラッテという小さな町にあるが、実は、コディーというのは、バッファロービルのこと。一日で千頭以上ものバッファローを殺したというコディーは、それ以来、バッファロービルと呼ばれるようになったそうだが、実は、かれはカウボーイであり、そして、ポニー・エクスプレスのライダーでもあった。そして、晩年にはワイオミングの北部を本拠地にして政治家としても活躍したようで、その名残で今でもコディーという町が残っているほどである。そのコディーがノースプラッテにも牧場ももっていて、その関係でここにフォルト・コディーがあるというわけ。インディアンとの共存に尽力した彼は、その意味でも西部の英雄でもあるわけだ。このフォルト・コディーは実は、ミュージアム、謙、土産物屋で、



西部で活躍したカウボーイの使用していたグッズのほかにインディアンの民芸品なども沢山販売されていた。しかも、土産物屋にしては、どこよりも値段が安いような気がした。ここで、念願の毛皮のカウボーイハットを手に入れた。以前からカウボーイハットはもっていたが、それは、現代風のちょっと高級なもので、実際カウボーイがかぶっていたものとは少しイメージが異なる。今回購入したものは、**Silverton**

今度の旅で手に入れた **Silverton** の帽子(左) というタイプで、牛側でできていて、少し重量はあるがいかにもいかめしく、少々荒々しく使ってもへこたれないようなハットだ。幾ら痛めつけられても、まだまだ耐え抜いていくという感じのこの帽子のいいところ。とてもお気に入りである。最後に日にこんな収穫があるとは、ということで、今回の旅もたいへん沢山の収穫があり心よくしてリンカーンに辿りついたというわけ。

この日の行程

Denver → North Platte → Kearney → Grand Island →

Lincoln

走った距離は、510mile

こうして、全行程を走り抜けた、Honda Accord Blue PJH584 には、時にガタガタ道、そして、時に、急な岩山の登りと、本当によく走ってくれたと感謝しています。

全行程の総走行距離は、4450mile、^{*}数にして、7120 キロでした。これは、日本の稚内から鹿児島までを二往復近くしたことになります。よく、走りました。

でも、また、やるぞおー。